

# 漢訳『般若灯論』所収の 『中論頌』について

安井光洋

はじめに

Nāgārjuna (ca.150-250) の主著『中論頌』*Mūlamadhyamakakārikā* (MMK) の注釈書である *Prajñāpradīpa* (PP) は Bhāviveka (ca.490/500-570) の著作であり、チベット語訳 (PP Tib.) と漢訳『般若灯論釈』(『灯論』) が現存している。しかし、PP Tib. と『灯論』は本来同一のテキストがそれぞれの言語に訳されたものであるにも関わらず、多くの点で相違が見られる。このような相違をめぐっては月輪1929a、1929b、1931、羽溪1930といった先行研究において、『灯論』の訳者である波羅頗迦羅蜜多羅 Prabhākaramitra (564-633) による翻訳の不備として指摘されている。

また PP Tib. と『灯論』の相違は両者の本文中に含まれる MMK にも見られ、『灯論』所収の MMK は PP Tib. に収録されているものと比べると数が不足している。収録されている MMK の偈頌の総数が注釈書によって異なることは様々な先行研究においてすでに指摘されているが<sup>(1)</sup>、『灯論』に見られる偈頌の不足は、他本と比べてとりわけ著しい。

このような偈頌の不足について月輪1929aでは「最も大切な本論偈を勝手に抹消したり敷衍したり、或は何等本論にない文言を少なからず混入したり、實に言語道斷、亂暴極まる譯し方を肯へてして居る。」<sup>(2)</sup>と評している。また羽溪1930も『灯論』のテキストが PP Tib. と比べて不足している箇所について「譯者任意の削除」<sup>(3)</sup>との見解を示す。しかし、これら両氏の論考はいずれも不足した偈頌のすべてを網羅して挙げてい

## 漢訳『般若灯論』所収の『中論頌』について

るものではない。また、実際にPP Tib.と『灯論』のテキストを比較、検討したところ、両氏の見解とは異なる可能性が考えられる例も確認された。

その検討の結果として、『灯論』に見られる偈頌の不足は2種に大別されることが明らかになった。それは「欠落型」と「埋没型」である。欠落型とはPP Tib.と比較した場合に、『灯論』のテキストから偈頌が欠落していることを意味する。また、この欠落型の不足が生じた原因としてさらに2つの可能性が想定される。一つは上記先行研究でも指摘されているような、訳者による意図的な削除という可能性である。しかし、これについて上記の論稿ではいずれも当該箇所を示すのみで、具体的な内容については論じられていない。よって本稿では、実際に偈頌の不足が訳者による削除であるとしたら、それはいかなる理由によって行われたのかということについて、先行研究では挙げられていない箇所を例として挙げながら考察していく。

そして、欠落型のもう一つの可能性は漢訳前のサンスクリット原本時点での欠損という可能性である。これは訳者が参照したPPのサンスクリット原本が何らかの形で欠損しており、当該箇所を参照することができなかったということを意味する。この可能性については拙論2022においても論じたが、それとは異なる箇所を例として本稿においても検討する。

次に埋没型であるが、これは当該の偈頌と同様の内容が『灯論』の本文中にも説かれてはいるものの、偈頌としてではなく、散文の形式で注釈部分に埋もれてしまっているというケースである。この埋没型についてもすでにいくつの例が月輪、羽溪両氏の一連の論稿において挙げられている<sup>(4)</sup>。しかし、これらの論稿で埋没型の全てのケースが取り上げられているわけではなく、また前述の欠落型と同様、その詳細については論じられていないため、これについても新たな例を挙げながら、そのような現象が生じた背景について考察を試みる。

以上のことから、本稿においては『灯論』の本文にMMKの不足が生

じた背景について、欠落と埋没という2種の分類に基づいて考察し、先行研究で論じられている内容の再検討と、新たな可能性の提示を行うことを目的とする。

## 1 偈頌の欠落

以下に挙げるのはMMK第8章第2偈および第3偈と、それに対するPP Tib.と『灯論』の注釈である。ここでは『灯論』のテキストで第2偈の後半(cd句)と第3偈の前半(ab句)が欠落しているので、それについて当該箇所を確認しながら考察していく。なお紙幅の都合上、PP Tib.、『灯論』ともに第2偈のa句とその注釈については割愛する。

MMK Chap.8 v.2 Ye 2011 p.136

sadbhūtasya kriyā nāsti karma ca syād akartṛkaṃ/

sadbhūtasya kriyā nāsti kartā ca syād akarmakaḥ//

すでに実在している(行為主体)に作用は存在しない。そして行為は行為主体を伴わないものとなるであろう。

すでに実在している(行為)に作用は存在しない。そして行為主体は行為を伴わないものとなるであろう。

MMK Chap.8 v.3 Ye 2011 p.136

karoti yady asadbhūto 'sadbhūtaṃ karma kāraḥ/

ahetukaṃ bhavet karma kartā cāhetuko bhavet//

もしまだ実在していない行為主体が、まだ実在していない行為を為すのであれば、

行為は原因の無いものとなるだろう。また行為主体も原因の無いものとなるだろう。

D.115a6-b1, 4-5 P.141b1-4, 7-142a2

las kyang byed po med par 'gyur/ / [MMK Chap.8 v.2b]

byed pa po des de ma byas pa'i phyir ro/ / yang na/

las kyang byed po med par 'gyur/ / [MMK Chap.8 v.2b]

zhes bya ba ni las yin par gyur par rtog pa (pa D; n.e. P) la/ las kyang las  
kyi ngo bo nyid yin pa'i phyir/ byed pa po la mi ltos pa yin te/ (ltos pa yin  
te/ D; bltos pa'i P) ngo bo nyid ni ltos (ltos D; bltos P) pa med pa'i phyir  
ro/ / des na byed pa pos ma byas pa nyid kyi las su 'gyur te/ ① 'dir yang  
rjes su (D.115b) dpag pa snga ma bzhin no/ /

yin par gyur la bya ba med/ /

byed pa po yang las med 'gyur/ / [MMK Chap.8 v.2cd]

② zhes bya ba ni phyed (phyed D; phyid P) gong ma shos (shos D; bshos  
P) kyi rjes su 'brang bas rnam par bshad zin pa'i phyir bshad mi dgos so/ /  
... da ni dam bcas pa'i don nye bar gzhag (gzhag D; bzhag P) pa gnyis pa  
sgrub (sgrub D; bsgrub P) pa'i phyir bshad pa/

gal te byed por ma gyur pa (ma gyur pa D; mi 'gyur ba P)/ /

las su ma gyur byed na ni/ / [MMK Chap.8 v.3ab]

des cir 'gyur/

las la rgyu ni med par 'gyur/ / [MMK Chap.8 v.3c]

byed pa po med par yang grub pa'i (P.142a) phyir ro/ /

byed pa po yang rgyu med 'gyur/ / [MMK Chap.8 v.3d]

byed pa po las mi byed pa dang/ las la mi ltos (ltos D; bltos P) pa yin pa'i  
phyir ro/ / ③ tshig le'ur byas pa'i phyed pa (pa D; n.e. P) 'dis kyang byed  
pa po dang las kyi chos byed pa po dang las dag phan tshun ltos (ltos D;  
bltos P) pa dang bcas pa nyid bstan to/ /

行為もまた行為主体を伴わないものとなるであろう。[MMK  
Chap.8 v.2b]

その行為主体によって、その（行為）が為されるのではないからで  
ある。あるいは

行為もまた行為主体を伴わないものとなるであろう。[MMK  
Chap.8 v.2b]

ということについて「行為が（存在する）」と考えるならば、行為もまた行為の自性を持つのであるから行為主体に依拠しない。自性は（何物にも）依拠しないからである。それゆえ、行為主体によって為されることのない行為となるであろう。①これについても推論は前述の通りである。

すでに存在している（行為には）作用は存在しない。行為主体も行為を伴わないものとなるであろう。[MMK Chap.8 v.2cd]

②ということについては偈の前半（v.2a,b）に伴ってすでに説明し終えているので説明する必要はない。 ... 今、提示された主張の2つ目の意味を証明するために述べる。

もしまだ行為主体になっていないものが、まだ行為になっていないものを為すならば、[MMK Chap.8 v.3ab]

それによってどうなるか？

行為に原因が無いことになるだろう。[MMK Chap.8 v.3c]

行為主体が無くても成立するからである。

行為主体にもまた原因が無いだろう。[MMK Chap.8 v.3d]

行為主体が行為を為さず、さらに行為に依拠しないからである。③この半偈（v.3cd）によっても行為主体と行為の性質が、行為主体と行為の相互的な依拠であることを意味している。

『灯論』 T.30 p.80b3-5, 12-16

業は無作者 [MMK Chap.8 v.2b]

釋曰。業亦如是。不觀作者自然而有。由無作者作是業故。 ... 復次今更立義。遮前所說。如偈曰

業及彼作者 則墮於無因。[MMK Chap.8 v.3cd]

釋曰。此後半偈欲顯業及作者墮無因過。此義云何。謂業離作者故。作者離業故。互不相待故墮無因。

以上を確認すると、『灯論』のテキストで第2偈の後半と第3偈の前

漢訳『般若灯論』所収の『中論頌』について

半が欠落していることが分かる。この欠落の原因については前述の通り訳者による意図的な削除という可能性と、サンスクリット原本の欠落という可能性の両方が考えられる。よって以下ではこの2種の可能性について順に検討していくこととする。

まず偈頌の欠落が訳者によって意図的に行われているという可能性であるが、その根拠となり得るのがPP Tib.の波線部①と②である。まず①では「推論は前述の通りである」とあるが、ここで言われている前述の推論とは、この直前の第2偈a句の注釈に示されている論証式<sup>(5)</sup>を指す。またこの論証式は『灯論』の同箇所にも示されている<sup>(6)</sup>。さらに②では偈頌のc、d句を挙げた後で、これについて「偈の前半に伴ってすでに説明し終えているので説明する必要はない」としている。このように、MMK第8章第2偈のb句以下に対してはa句の注釈部分ですでに説明し終えているので、さらに説明する必要はないとして、その冗長さが著者であるBhāviveka自身によって指摘されているのである。

よって、上記『灯論』に見られる偈頌のc、d句およびその注釈の欠落について、訳者による意図的な削除という見地に立つならば、Bhāvivekaによって示されたこのような解釈がその根拠として想定される。

しかし、そうであるとしたらPrabhākaramitraは訳者という立場でありながらPPの本文だけでなく、根本典籍であるMMKの偈頌まで削除しているということになる。そのため、MMKに対して權威を認めないこのような姿勢が訳者として許容されうるのかという点で大きな疑問が残る。そして、この点は前述の通り、先行研究においてもすでに指摘されていることである。

そこで、PPの翻訳過程でMMKがどのように認識されていたかについて『灯論』の序文を手がかりとして考察を試みたい。以下に挙げるこの序文は『灯論』の漢訳にも携わった慧曠によるものである。

『灯論』序文 T.30 p.50c3, 51b12

般若燈論者、一名中論。本有五百偈。龍樹菩薩之所作也。 … 此

土先有中論四卷。本偈大同。

これを見ると、まず前半で「般若燈論とは一に中論と名づく」というようにPPとMMKが混同されている。そしてそれに続いて「本は五百偈有り」として、MMKが本来は500偈あったと記されている。これについては先行する漢訳MMK注釈書である青目釈『中論』（『青目註』）の序文（僧叡筆）や、『青目註』と同じく鳩摩羅什訳である『龍樹菩薩伝』にも同様の記述が認められる<sup>7)</sup>ことから、MMKがもともと500偈から成る典籍であったという伝承は早い時点で中国において流布していたものと考えられる。しかしながら現行のMMK注釈書群に収録されているMMKの偈頌を確認すると、その総数は必ずしも一定しておらず<sup>8)</sup>、またいずれも500には満たない。

次に後半では「此の土に先に中論四卷有り。」とある。ここでいう「中論」とは『青目註』を指し、このことからPrabhākaramitraおよび彼の訳経グループが『青目註』について認識しており、さらに「本偈、大よそ同なり」とあることから、『灯論』と『青目註』に収録されているMMKの偈頌が完全には一致していないことも把握していたと考えられる。また、この記述以外にもPrabhākaramitra達が『青目註』所収のMMKについて知悉していたことは『灯論』所収のMMKの訳し方に、羅什による漢訳と一致する箇所が少なからず見受けられることから明らかである。

またこの第3偈の前半について『青目註』を確認すると、この偈頌を羅什は「若定有作者 亦定有作業」<sup>9)</sup>と漢訳しており、これは「もしまだ実在していない行為主体が、まだ実在していない行為を為すのであれば」という上記MMKに説かれている内容と全く逆の内容となっている。

以上のように、Prabhākaramitraは注釈書によって収録されている偈頌の総数や、そこに説かれている内容が異なっているという事実について、少なくともPPと『青目註』の例については認識していたことが分かる。このことから、PrabhākaramitraはMMKに対してある程度テキストの流

動性を許容していた可能性が考えられる。よってここに見られる偈頌の欠落がPrabhākaramitraによって意図的に削除されたものであるとしたら、PP原本に見られるBhāviveka自身による冗長さの指摘と、Prabhākaramitraの上記のような偈頌に対する認識が原因として想定される。しかしながら『灯論』で欠落している偈頌のすべてにこのような冗長さの指摘がなされているわけではないため、ここに示した可能性はすべての欠落の例に当てはまるものではない。またPrabhākaramitraがMMKのテキストの流動性を容認していたとしても、『灯論』のテキスト全体に渡って大幅な偈頌の削除を行っているという点は根本典籍への敬意という観点から依然として疑問が残る。

次にこの偈頌の欠落がサンスクリット原本の欠損に由来するという可能性について検討していこう。これについては、まず『灯論』の波線部にあるように第3偈の後半がその直後の注釈で「此の後半偈」とされていることから、PP Tib.の波線部③と同様にこの箇所が偈頌の後半として挙げられていることが分かる。しかし、前述の通り『灯論』では第3偈の前半が欠落しており、また第2偈の後半も欠落している。そのため、この箇所がもともと欠損していたとしたら、この箇所を参照したPrabhākaramitraは第2偈の前半と対になる句としてこの第3偈後半を理解していたということになる。

しかしながら、この可能性については大きな疑問が残る。この箇所が意図的に省かれたにせよ、あるいは原本の欠損に起因するものであったにせよ、Prabhākaramitraが『青目註』の内容を把握していたことは上記の理由から明らかである。そのため、PPの原本に欠損が認められた場合、『青目註』から欠損箇所を補填することも可能だったはずである。これについては実際に、『灯論』の本文中に『青目註』の本文からの借用が認められることが月輪1929aにおいても指摘されている<sup>(10)</sup>。そうであるにも関わらず、なぜPrabhākaramitraは羅什によって訳された第3偈前半をここに補填しなかったのだろうか。

以上のように、『灯論』に見られる偈頌の欠落をめぐるは訳者によ



る削除と、サンスクリット原本の欠損という2つの可能性が考えられるが、訳者による削除の可能性については「根本典籍に対する訳者の姿勢」という点で問題がある。他方、原本の欠損という可能性については、先行する漢訳である『青目註』が参照可能であったにも関わらず、そこからの補填が為されなかったという点で疑問が残る。このように、どちらの可能性にも問題があり、その原因を明確に判断することは極めて困難であるが、PP原本と『灯論』の間に見られるテキストの相違をめぐっては『灯論』の序文に次のような一文が記されている。

『灯論』序文 T.30 p.51a3-4

若舍通本末、有六千偈。梵文如此。翻則減之。

これによるとPPのサンスクリット原本は6000偈に相当する分量があり、また漢訳後の『灯論』の内容がそのサンスクリット原本と比べて不足していることが明言されている。また、この「6000」という数字は現存するチベット最古の一切経目録である『デンカルマ目録』に示されているPPのシュローカ数とも完全に一致している<sup>(11)</sup>。さらに、これについては慧曠と同じく『灯論』の漢訳に携わった法琳の『弁正論』にも「般若燈論、梵本有六千餘偈。」<sup>(12)</sup>と記されていることから、PPのサンスクリット原本の分量についてはチベット、中国ともにはほぼ同様の伝承が伝わっていたということになる。

以上の記述により、Prabhākaramitraは自身が訳した『灯論』の内容がPP原本と比べて不足していることを認識していたと考えられる。しかし、それが原本の欠損に起因するものであるのか、自身の意図的な削除によるものであるのかは定かではなく、またどの程度の不足であるかについては記されていない。

## 2 偈頌の散文への埋没

ここからは冒頭で述べた2種の不足のうち、埋没型に該当するものに

漢訳『般若灯論』所収の『中論頌』について

ついて確認していく。前述の通り、この埋没型についてはいくつかの例が月輪、羽溪両氏の論稿においてすでに論じられているが、以下ではそこで取り上げられていない例を挙げる。例として挙げるのはMMK 第25章第1偈と、それに対するPP Tib.と『灯論』の注釈である。また参考としてMMKの第2偈も挙げる。

MMK Chap.25 v.1 Ye2011 p.450

yadi sūnyam idaṃ sarvaṃ udayo nāsti na vyayaḥ/

prahāṇād vā nirodhād vā kasya nirvāṇam iṣyate//

もしこの一切が空であるならば、生じることはなく、滅することも  
ない。

何を断ずることにより、あるいは滅することにより涅槃が認められるのか。

MMK Chap.25 v.2 Ye2011 p.450

yady aśūnyam idaṃ sarvaṃ udayo nāsti na vyayaḥ/

prahāṇād vā nirodhād vā kasya nirvāṇam iṣyate//

もしこの一切が空ではないならば、生じることはなく、滅することも  
もない。

何を断ずることにより、あるいは滅することにより涅槃が認められるのか。

PP Tib. D.234b3-5 P.294a5-7

’dir smras pa/ khyod ’dod pa ltar/

gal te ’di dag kun stong na//

’byung ba med cing ’jig pa med// [MMK Chap.25 v.1a,b]

ngo bo nyid med pa’i phyir dper na mo gsham gyi bu bzhin no (no D; no/ /  
P) zhes bya bar bsams so// de dag med pa’i phyir nyon mongs pa rnams la  
yang ’byung ba dang ’jig pa med la/ de dag dang ldan pa’i ming dang/

gzugs la yang 'byung ba dang 'jig pa med pas/

gang zhig spangs dang 'gags pa las//

mya ngan 'da' bar ('da' bar D; 'das par P) 'gyur bar 'dod// [MMK  
Chap.25 v.1c,d]

ここで（反論者が）言う。汝（中観派）が主張するように

もし、これらすべてが空であるならば、【主張】生じることは  
なく、滅することもない。[MMK Chap.25 v.1a,b]

【証因】自性が無いからである。【喩例】たとえば石女の息子のよう  
に。と考えられる。それらが存在しないので、諸煩惱もまた生じる  
ことも滅することもない。それらを伴った名称と形態もまた生じる  
ことも滅することもないので、

何を断じ、滅することで涅槃すると説くのか。[MMK Chap.25  
v.1c,d]

『灯論』 T.30 p.128a9-13

婆沙人言。彼先言。若一切非空、則無有起滅。[MMK Chap.25  
v.1a,b?] 此謂無自體義。無自體者如石女兒、則無起滅。煩惱無自  
體故、非是起滅。而煩惱及名色因亦非起滅者、如上偈説。無斷苦證  
滅、復誰得涅槃。[MMK Chap.25 v.1c,d?]

これを見ると、まずPP Tib.と『灯論』で類似した内容を説いている  
にもかかわらず、『灯論』ではMMKが偈頌として認識されておらず、  
散文の注釈の中に埋没して記述されていることがわかる。また、上記『灯  
論』のテキストにはもう一つの問題が認められる。それは偈頌に当たる  
箇所の内容が第25章の第1偈ではなく、それに続く第2偈になっている  
ということである。まずはその問題について検討していく。

はじめにMMKの原文を確認すると、この第1偈と第2偈は「もしこ  
の一切が空であるならば (yadi sūnyam idaṃ sarvam)」と「もしこの一切  
が空ではないならば (yady aśūnyam idaṃ sarvam)」という箇所を除いて、

完全に文章が一致していることが分かる。これは第1偈が反論者からの論難が述べられている偈頌であり、続く第2偈が中観派からの反駁であることを意味している。つまり、反論者が「中観派が言う通りすべてが空であるとしたら涅槃が認められなくなってしまう」と主張しているのに対して、中観派は「むしろ、すべてが空でなければ涅槃が認められない」と反駁しているという文脈である。

そして、上記の箇所ではPP Tib.は第1偈を引用しているのに対し、『灯論』では第2偈を引用している。このような相違に基づき両者の解釈を比較すると、まずPP Tib.では「汝（中観派）が主張するようにもし“これらすべてが空である”としたら、生じることはなく、滅することもない。」という解釈により第1偈を引用していると考えられる。他方『灯論』については「彼、先に“若し一切が空に非ずんば、即ち起滅あること無し”と言えるは、此れ謂く無自体の義なり。」と読解すべきだろう。すなわち偈頌のどこまでを中観派の説の引用と見るかの線引きが異なるということである。

またPP Tib.を参照すると、この第1偈は3度引用<sup>(13)</sup>され、第2偈は2度引用<sup>(14)</sup>されるが、『灯論』ではそのうち第1偈の2回目の引用と、第2偈の1回目の引用に相当する箇所が欠落している<sup>(15)</sup>。さらに『灯論』で引用されている箇所についてはいずれも「この一切が空ではないならば」という第2偈の内容になっている。そのため、『灯論』の本文中では第2偈に相当する偈頌が3度引用されており、第1偈の「この一切が空であるならば」という内容は1度も説かれていないということになる<sup>(16)</sup>。

何故このように『灯論』のテキストから第1偈が省かれ、第2偈に置き換えられたのかは定かではないが、強いて理由を類推するのであれば、PP Tib.に見られるように第1偈のb句だけが主張として論証式の一部に組み込まれ、そのまま散文へ続くという文脈の晦渋さを訳者が嫌ったと考えられようか。

次に、この箇所が『灯論』のテキストで散文中に埋没しているという問題であるが、これについては訳者の誤読によって偈頌ではなく散文と

して翻訳されたという可能性の他に、翻訳過程とは異なるタイミングで生じたという可能性が考えられる。すなわち『灯論』の書写時もしくは大蔵経としての編纂時に散文へ混入したという可能性である。その理由は2つあり、まず一つ目の理由はこの偈頌に相当する箇所が前半、後半を合わせて五言絶句の形式になっていることが挙げられる<sup>(17)</sup>。これ以外の埋没型の不足箇所が先行研究において指摘されていることは前に述べたが、それらの例はいずれも字数が整えられておらず、散文の形式でMMKの偈頌が漢訳されているというものであった。そのため、それらのケースについては訳者によって散文に組み込まれたと考えられる。それに対して、ここに挙げた例では五音（字）の句が4つという五言絶句の形式になっているのである。

そして、もう一つの理由は偈頌の後半を引用する直前に「上偈に説くが如し」とあることによる。このことから、本文の文脈の中ではこの箇所が偈頌として理解されていることが分かる。そのため三枝1985ではこれを根拠としてこの箇所をMMKの偈頌と対応させている<sup>(18)</sup>。また、『灯論』では同様の偈頌が全部で3度引用されていることはすでに述べたが、ここに挙げた引用以外の2箇所でもそれぞれ「如彼偈説」<sup>(19)</sup>、「如先偈説」<sup>(20)</sup>とあることから偈頌として認識されていることが分かる。

上記2点を根拠として、この箇所の偈頌の埋没に関しては翻訳上の問題に由来するものではなく、『灯論』の書写時もしくは大蔵経としての編纂時点で生じたという可能性が考えられる。これについて『灯論』で挙げられているその他の偈頌を確認すると、いずれも引用される直前で「偈に曰く」もしくは「偈に曰うが如し」といった表記がされている。そして、それをきっかけとして大蔵経のテキストでは改行され、偈頌として散文と区別して記載されている。他方、PP Tib.では必ずしも偈頌の直前に「以下がMMKの偈頌である」というような断り書きがされているとは限らない。以上のことから『灯論』のみに見られる偈頌直前の記述については漢訳時点で付加されたものと考えられる。

しかし、このような『灯論』の偈頌を示すメルクマールについては船

## 漢訳『般若灯論』所収の『中論頌』について

山2013において重要な指摘がなされている。同書ではまず前述の『弁正論』に、『灯論』漢訳の途中で訳経グループのうち、筆受の担当者が交代したと記されていることを挙げる。その記録によれば『灯論』全15巻のうち、前半9巻までは慧蹟が筆受を担当し、後半6巻では法琳が筆受したとのことである<sup>(21)</sup>。そして、それに基づき同書では偈が引用される際に前半9巻では「如偈日」、「論者偈日」とあるのに対し、後半6巻では「故論偈言」、「如論偈説」となっているとして、筆受の交代に起因する翻訳の癖を指摘している<sup>(22)</sup>。

これを踏まえると、それらの表記とは異なった形で挙げられている偈頌については、訳者によって五言絶句の形式に則って漢訳されてはいるものの、NāgārjunaによるMMKの偈頌としては認識されていなかったという可能性も考えられる。しかし、そうであるとしたら上記『灯論』の本文中で「一切が空であるならば」という反論者の偈頌を挙げず、かつ中観派側の偈頌である第2偈に相当する箇所を偈頌と認識しつつ3度に亘って引用しながらも、MMKの偈頌として解釈していないということになる。

このように、散文中への偈頌の埋没については翻訳時点で生じた可能性と、それ以降の『灯論』の書写ないし大蔵経の編纂時点で生じた可能性の2種が想定されるが、どちらの可能性にも疑問が残る。

## 結語

ここまで『灯論』所収のMMKにPP Tib.と比べて不足が認められることをきっかけとして、欠落と埋没という2種の観点から考察を行ってきたが、現行『灯論』の成立をめぐるはこれまで見てきたように様々な要因が交錯しており、MMKの不足の個々の事例について明確な原因を特定することはできなかった。

しかしながら、先行研究ではただ「訳者による任意の削除」と指摘されるだけだった偈頌の欠落については、PPに見られるBhāviveka自身の解釈に基づいて本文の削除を行なったという可能性が新たに考えられた。

また訳者である Prabhākaramitra ならびに彼の訳経グループが、『灯論』と『青目註』にそれぞれ収録されている MMK の異同について把握しており、さらに自ら漢訳した『灯論』のテキストについて PP のサンスクリット原本と比べて内容が不足していたことを自覚していたことが明らかになった。

そして、偈頌が散文に埋没しているケースについては訳者による誤読の可能性の他に、それ以降の書写ないし大蔵経の編纂に際して生じたという可能性を提示した。

しかし、『灯論』の本文中で MMK が欠落している例は今回挙げた例の他にも多く存在する。今後はそれらの例についても本稿の考察を踏まえつつ、検証していく予定である。今回は先行研究で取り上げられて以来、久しく論じられてこなかった MMK の不足という問題について、それらの研究とは異なる観点から考察を試み、新たな可能性についていくつかの例を提示した。

#### 略号および使用テキスト

D : sDe dge edition

MMK : *Mūlamadhyamakārikā* → see Ye 2011

P : Peking edition

PP : *Prajñāpradīpa*, D. No.3853, P. No.5353

T : 大正新修大蔵経

青目註 : 青目釈『中論』 T.30 No.1564

『デンカルマ目録』 D. No.4364, P. No.5851

灯論 : 『般若灯論釈』 T.30 No.1566

『弁正論』 T.52 No.2110

『龍樹菩薩伝』 T.50 No.2047

#### 参考文献

三枝充恵

1985 : 『中論偈頌総覧』 第三文明社

## 漢訳『般若灯論』所収の『中論頌』について

斎藤明

2011: 「新出『中論頌』の系統をめぐって」『印度學佛教學研究』59-2 pp.111-119

齊藤隆信

2013: 『漢語仏典における偈の研究』法蔵館

月輪賢隆

1929a: 「漢訳般若灯論の一考察」『密教研究』33 pp.1-20.

1929b: 「漢訳般若灯論の一考察（其二）」『密教研究』35 pp.19-32

1931: 「漢訳般若灯論の一考察（其三）」『密教研究』40 pp.43-53

羽溪了諦

1930: 「般若燈論解題」『国訳一切経』中観部2 pp.1-19

船山徹

2013: 『仏典はどう漢訳されたのか ― スートラが経典になるとき』岩波書店

安井光洋

2018: 「『中論』注釈書の漢訳について」『智山学報』67 pp.21-33

2022: 「漢訳『般若灯論』第25章をめぐる諸問題」『密教学研究』54 (2022年出版予定)

Ye Shaoyong (叶少勇)

2011: 『中論 梵蔵漢合校・導読・訳注』中西書局

## 註

- (1) この問題について論じた近年の研究としては斎藤2011があるが、ここでは「テキストとしての信頼度」(p.112)を理由に『灯論』が除外されている。また、『灯論』も含めた偈頌の異同関係については三枝1985において網羅的に紹介されている。
- (2) 月輪1929a p.6
- (3) 羽溪1930 p.15



- (4) 散文への埋没が指摘されている偈頌と、それを取り上げている論稿はそれぞれ第1章第6偈後半(羽溪1930)、第2章第2偈前半(月輪1929a、羽溪1930)、第23章第14偈(羽溪1930)となっている。
- (5) D.115a2-4, P.141a3-6
- (6) T.30 p.80a15-24
- (7) 「中論有五百偈、龍樹菩薩之所造也。」(『青目註』 T.30 p.1a6)、「中論五百偈。」(『龍樹菩薩伝』 T.50 p.184c19)
- (8) 各注釈書に収録されている偈頌の総数はそれぞれ『青目註』445偈、PP Tib.および『無畏論』、『仏護註』が447偈、そして『明句論』が449偈である。また『灯論』については本稿において後述するように、『灯論』の書写もしくは大蔵経編纂の時点で本来偈頌であった箇所が散文に埋没してしまった可能性があるほか、前述のように偈頌の前半もしくは後半だけしか収録されていない箇所もあるため総数の確定が困難である。そのため、本稿では『灯論』所収の偈頌の総数については確定させない。
- (9) T.30 p.12b27
- (10) 月輪1929a p.7。なお同論文では『青目註』から補填された箇所があるという事が報告されているのみである。具体的な事例については拙論2018および2022において論じている。
- (11) D.387a1, P.368b6
- (12) T.52 p.513b24
- (13) D.234b3-4(v.1a,b), 4-5(v.1c,d), 235a4, 235a7(v.1a,b), 7-235b1(v.1c,d), P.294a5(v.1a,b), 7(v.1c,d), 294b7, 295a3-4(v.1a,b), 4(v.1c,d)
- (14) D.235a5, 235b2(v.2a,b), 2-3(v.2c,d), P.294b8, 295a6(v.2a,b), 7(v.2c,d)
- (15) この欠落については拙論2022において論じている。
- (16) これについて三枝1985では『灯論』の第1偈を「なし」とし、本稿の本文で引用した箇所を第2偈の初出として挙げている。
- (17) 厳密に言えば五言絶句には押韻の規則があるが、齊藤2013によればほとんどの訳経における偈は「一句中の音節数(=字数)を均一にそろえることはあっても、脚韻を配慮することはない。」(p.201)とされている。また同書は『青目註』も含めて「羅什訳の論書の偈頌もみな無韻である」(p.429)としている。このことから『灯論』に見られる偈頌についても押韻は考慮に入れないこととする。
- (18) 三枝1985 p.817。ただし、ここでは先の注に記したように、この偈頌をMMKの第2偈に対応させている。
- (19) T.30 p.128b3
- (20) T.30 p.128b8

漢訳『般若灯論』所収の『中論頌』について

(21) 「縛解品已前慧蹟執筆、觀業品已後法琳執筆。」(T.52 p.513c20)

(22) 船山2013 pp.93-94

キーワード

般若灯論、*Prajñāpradīpa*、中論、*Mūlamadhyamakakārikā*